を是認する大倧教の思想は、世界観の差異からくる宗教間の紛争を調整して、この点において宗教統一の可能性を提示している。

結論として、大倧教は韓国の民族宗教であるが、その教理の総合性から見て、世界宗教の樹立を目指す宗教統一に寄与することができると考えられる。



セッションⅨ

# 天理教の経典から見た アジア共同体構想と宗教統一

**西山輝夫**

一九二六年生まれ。京都大学文学部、哲学科卒業。天理教道友社に入社し、編集委員を務め、天理教校、天理医学技術学校等の講師を兼任。現在（ソウル）国際大学客員教授。専攻、ギリシャ哲学及び天理教学。主な著書『天理教とは』（上・下巻）『ひながたを身近に』他。

# 教祖中山みき

## 一　はじめに

天理教の立教は一八三八年であり、正式に教会という組織ができたのは一八八八年のことである。言い換えると、天理教という新しい宗教が、日本という国に生まれてから約一五〇年の歴史と経験があり、そのうち、教団という身体に相当する組織が活動を開始してからは約百年という年月が経過している。これを世界宗教と言われるものと比べると、十分の一以下の経験と実績しか持っていないという段階にある。

単に時間的なことにとどまらず、空間的にもこれははっきりと現れている。天理教は現在のところ、「点と線の宗教」であって、「面の宗教」という域には到達していない。共同体というのは、「面の宗教」が長い時間をかけてつくり出すものとすれば、天理教は共同体と関連する事柄について、具体的な提言をするには、経験が著しく不足しているのである。

しかし、立教当初から課せられた使命からすると、たとえ現状がどうであれ、共同体の理念と無関係であるとはいえない。そこで天理教立教の趣旨を振り返り、ついで教理の根本にふれ、そこから未来に対する基本姿勢を考察してみたいと思う。

## 二　教祖中山みき

天理教の教祖は中山みきというが、後の天啓書によれば、「ほん何でもない百姓屋の女一人」といわれているように、どこにもいる平凡な農家の主婦であった。時代は江戸時代の末期で、封建的な色彩の濃厚な頃である。所は当時の大和国（奈良県）北部の小さい農村で、政治・経済の中心からはずれた、いわば眠ったような地帯であった。また百姓といえば、国民の八割がそれであり、働いて領主に税金を収める義務だけが強制された階層で、世の中や人を指導したり、教育する立場にはおかれていなかった。こういう情況からすると、中山みきという中年の主婦が、天理教という新しい宗教を始める条件はほとんどなかったと見られます。

しかしそれは人間の目から見た話であって、神の働きの世界はまた別のもののようである。そして事実、天理教は、後に教祖となった中山みきという女性が、宗教的な修行を重ねたり、大いに勉強して創設したのではなく、人間の目からすれば、まことに突然にして不可解な天啓現象によって始められたタイプの宗教である。

詳しい事情は省略することとして、一八三八年秋、神の啓示により、中山みきは「神のやしろ」に定まった。「神のやしろ」というのは、おふでさきという教理書によると、

「口は人間心月日や」と定義されているように、身体は通常の人間と異なるところは一つもないが、心はこの世・人間を創造した神の心と同一であるという立場の人のことを指す。そして神の心というのは、子供である世界中の人間を助けたい一条の心であると示されている。この「神のやしろ」に定まった中山みきを教祖といい、天理教信者は「おやさま」と呼ぶならわしになっている。





## 三　天理教の信仰と思想

### （1）世界一列の救い

最初の啓示は「我は元の神・実の神である。このたび、世界一列を助けるために天降った」とあったと伝えられている。「世界一列」というのは、世界中の人間という意味である。天理教は日本という国に興った新宗教であるが、この啓示によると、そもそもの発端から、全人類の救済を目的として始められた宗教であり、狭い日本人のみの宗教に終わったら、その目的に反することになる。

「一列」というのは興味深い表現である。人間は上下に一列になることはできない。肩車の上に一人乗り、その上にまた乗るというのでは、サーカスの名人でも、せいぜい三人か四人というのが限度で、そもそも安定を欠いている。同じ平面に秩序をもって並んで初めて、安定した一列の姿が成り立つのである。

平面における一列でも、タテの一列とヨコの一列がある。タテの一列は優先順とか能力によってできてくる順位で、タクシーを待つ行列とか、学校の成績のランキング等に典型的に現れる。早い者勝ち、強い者勝ちで、自由の原理がここに働いている。それに対しヨコ一列というのは、順序に関係がなく、平等の原理を現しているようである。天理教の一列というのは、どちらかというとヨコ一列の傾向が強くうかがわれる。言葉を換えると、基本的人権の尊重と確立が、救済実現の不可欠の要素とされていると考えられる。

## (2) 陽気ぐらし

### ① 現世肯定の精神

では「たすける」とはどういうことか。別の言葉では「陽気ぐらし」と教えられている。「陽気ぐらし」とは、世間一般でいう幸福と重なる部分がかなりあるが、「陽気ぐらし」イコール幸福というのではない。幸福というのは世俗的、物質的、自己中心的な匂いがつきまとうが、「陽気ぐらし」というのは精神の浄化、すなわち「心が澄む」という条件に応じて現れてくる好ましい状態を意味するもののようで、いわば善と幸福の一致といってもよろしいかと思う。そして信仰者の目指すべきものは、まず善であるということになる。

「心を澄ます」方法といっても、座禅をくむとか、静かな環境で瞑想をしたりお祈りをする、あるいは厳しい修行をしたり、戒律を守るという筋道は重しとされない。日常生活の中での活動が大切で、それは「人をたすけて我が身たすかる」という教えにもよく現れている。神の心が人間を助けたいということにあるとしたら、自分もお手伝いをするべく、何によらず人を助け、人を喜ばすことをモットーとして生きてゆく。その結果、おのずと自分の身の幸福も与えられてゆく。人を助けるという善の基礎の上に樹立された幸福が「陽気ぐらし」というにふさわしい内容のものであるとされるようである。

といって、天理教は特に倫理的宗教というのではない。モラル（Moral）よりむしろモラール（Morale）を重視するようである。正しく生きるということも大切であるが、その裏に入れば、自分一人を誇るとか、反対に人を心で責めるという冷たさがややもすると出てくる。偽善者も生じるであろう。天理教ではそれよ





りも、喜んで生きる、勇んで生きることをよしとする。この勇んだ状態は、神の心をよく理解し、その教えに添って生きることに最高の意義を認めるからできることで、当然正しいということと結び付いている。

「陽気ぐらし」は、人間としてこの世界に生まれてきてよかったという喜びを十分に味わうことでもある。せっかく生まれてきたけれども、少しもよくなかったという失望、悲観、絶望とは別のものである。しかもこの喜びは死後の世界において味わえる種類のものではなく、現世おいて、この地球という舞台で、心次第によってだれでも味わえる境地であるとされる。なぜなら神の人間創造の目的は「陽気ぐらし」であり、こういう先天的約束の上に成り立っている人間世界であってみれば、「陽気ぐらし」の境地は必ず実現するはずであり、これはいかなる力をもってしても妨げることはできないのであるという、たくましい現世肯定の精神が天理教には流れている。

### ② 元の因縁

私の理解するところによれば、キリスト教の説く原罪の思想は、このままでは陽気ぐらしできないという人類共通の先天的悪因縁といえるかと思う。それに対し、天理教でいう、神は陽気ぐらしを目的として人間を創造されたという思想は、その素質を順調に伸ばしてゆくならば、陽気ぐらしできるという人類共通の先天的善因縁なるものを、人間は本来持っているのだと考えることができる。これを天理教では「元の因縁」といい、これを自覚するところに喜びが生じるとされるのである。

これはあまりに楽観に過ぎる、深刻な人間洞察に欠けているという批判を受けるかもしれない。しかしこ

こで弁明を許されるならば、このように天理教は、根本的には楽観的であるが、それはあくまで神の人間創造の目的を、何より重く受けとっているからである。神を徹底的に信じたとき、陽気ぐらしに対する希望と確信が生まれる、行動力も出てくる。しかし神を見失えば、同時に陽気ぐらしに対する希望も薄れてゆくという構造にあると思う。

神なき社会主義者の信奉しているのが唯物史観であるとすれば、天理教は陽気ぐらし史観の信奉者である。すなわち人類は創造以来ひたすら陽気ぐらし実現に向かって歩んでいると認識するのである。たとえ現実の世界に飢えと貧困があり、核兵器の恐怖と戦争の悲惨があり、ガン克服の道はまだ発見できないとしても、陽気ぐらしへ向かっての歩みは挫折することはないと信じているのである。

## (3) 身上・事情

この陽気ぐらしの実現の上に妨げとなる面の強いものを一括して、身上・事情といっている。身上というのは、広い意味では身体を指すが、狭くは身体に現れてくる異状、すなわち病気を指す。事情もこれと同じく、広くは生活環境上に現れる一切の事柄を指す。すなわち誕生も結婚も就職もすべて事情である。狭くは、生活環境上に現れてくる悩みをいう。難儀、不自由といってもよろしい。

事情の悩みには幅があって、家庭不和、一家の貧乏、子供の非行化というレベルから、戦争、世界不況、気候不順をはじめ、公害による環境汚染、交通事故の深刻化等、一切を含む。

社会人の通常意識からすると、こういう身上・事情のない世界が最善であります。すなわち病気に苦しむ





こともなく、家庭がよく治まって、生活が安定している。そして国も社会も平和であれば幸福感が味わえるというものである。しかしこれだけだと、隣人の不幸に痛みを覚えるという人間愛は薄れがちであるし、目に見えない他国の飢えや悲惨に対する同情も湧きにくくなる。日本人が何かにつけて世界から非難されるのは、こういう自己中心的な幸福感が問われているためではないかと思う。

## (4) 各種の苦しみへの対処

これに対し天理教では「身上・事情は道の華」と受けとっている。病気や貧乏はつらいものであるが、その中でも神の存在を信じ、神の心に生きる道を選んでゆけば、やがてそこから幸福という花が咲き、実がみのることも期待できる。そのときの喜びの質の深さは、不幸を体験しないで得られた幸福よりはるかに上であるとするのである。病気や貧乏は即不幸であるという思想に対し、天理教では、それらは現在にとって不幸をもたらす事柄ではあるが、心次第によっては、プラスと化せしめることができる。またそうでなければならないと考えるのである。言葉を換えると、病気や貧乏であっても、信仰によって陽気ぐらしは可能であるとするのである。

人生途上に生じる各種の苦しみにいかに対処してゆくか。これはどの宗教にとっても重要な課題であるが、その対処のスタイルにはそれぞれ特徴がうかがわれるようである。例えば仏教では、執着を去るとか、世界は空なりと観ずるとか、いわば主観的方法が共通して流れているようだし、キリスト教では苦難を耐え忍び、祈るという傾向がどちらかというと強いように思われる。いずれにしても救済の筋道に関わることである。

# 四　天理教の救済について

## （1）モラルよりモラール

ここで天理教の救済について簡単にお話し申し上げることにしたい。

大抵の宗教には信者が守るべき戒律というものが設けられている。イスラム教では特に厳しいようである。人間の心は自然に放置しておくと、悪の誘惑に負けやすいものであるが、それに対し、神もしくは仏の権威の名によって一定のワクをはめ、救済を受けるにふさわしい人間の側の条件をつくろうというのが戒律の主要な目的であると理解するが、天理教ではそういう救いの条件としての戒律はないか、ないに近いといえる。これは一般信者も教会長など専門職にも共通している。原典を通観すると、「……してはならない」という表現より、「……せよ」という言い方の方が多いのである。これはモラルよりもモラールを重視することとも関係がある。あるいは善悪は既に二千年以上戒律で教えてきたから、繰り返す必要はない。それより高い意味の充実した喜びをつくり出すことに力を注ぐことが大切であるという思想もあるかと思う。

## （2）思案

瞑想は心を静め、知恵を得るにはよい方法であるが、天理教ではやかましくいわれることはない。けれども「思案せよ」ということは繰り返し強調されている。この場合の思案というのは、神の心をしっかり探求





し、迷ったり疑ったりする不安定な状態から、全身全霊をもって神の心にもたれて通る生き方を確立せよといわれているのである。そういう意味では、天理教では、神の言葉に盲従するのではなく、他宗教の教えとも照らし合わせてよく考察し、納得した上で信仰せよといわれているわけで、近代精神にも合致する面がある。すなわち天理教は唯我独尊になることを避け、他宗教に対し寛容であることを教える。これは共同体構想に必要な態度の一つであると思う。

## （3）つとめ

教理の本筋からすると、天理教の救済の根本は「つとめ」といわれる独特の祭儀である。地歌と鳴物（伴奏楽器）に合わせて定められた人数が踊りを捧げる様式のもので、通常、月に一度勤められる。これを月次祭という。

「つとめ」の地歌を「みかぐらうた」という。第一節から第五節まであり、第五節は十二下りといって、親しみやすい数え歌の形式になっている。第一節はカソリックの主禱文に相当するもので、「悪しきを払うて救け給え　天理王命」と二十一遍繰り返して唱える。「悪しき」とは病気や貧乏等、外に現れた悪しき事柄ではなく、そういう悪しき事柄に組み合わされても仕方がないような心の内部の悪しき心遣いを指す。

天理教では、その信奉する神を親神といい、祈念する時は天理王命という神名を唱える。イスラム教がアラーの神を唱えるのと似たようなものと考えて頂いても結構である。以後は神という言葉ではなく、親神という呼称を用いることにするが、親神とは人間の親である神ということで、畏れ敬うべき神ではなく、人類

の誕生以来その生死のすべてを通じて、子供である人間を守護し、陽気ぐらしへ導いてくださる親のような神と観念しているのである。この親神の下、世界一列の人間は可愛い子供であり、お互いは兄弟であるとされる。すなわちキリスト教徒も仏教徒も無神論者も、親神の観念の下ではすべて兄弟であって、他人というはさらにないといわれている。そして親神は人間をたすける、人間同士は兄弟愛をもってたすけ合う。これが陽気ぐらしへの道筋になる。

## (4) さづけ

「つとめ」が世界一列の人間の陽気ぐらしを願って勤める祭儀であるとすれば、「さづけ」は病気に苦しむ人に、親神の人間をたすけたいというお心を取り次ぎ、病気がよくなることを祈る行為を指す。天理教教祖は数多くの病人をたすけることによって、親神の存在とその絶大な働きを人々に教えられた。それを「ふしぎなたすけ」という、「さづけ」はこの「ふしぎなたすけ」が教祖ただ一人に現れたものではなく、教祖のお心をわが心として生きる人の上にも現れることを示されたものであるともいえる。

高等宗教は魂の救済を主とするものであり、天理教は病気たすけをするから低級であるという批判をよく耳にする。これには当たっている点と当たっていない点があると思う。なるほど、一度や二度、奇跡的に病気がよくなっても、人間である以上、いつかは何らかの病気で必ず死ぬ。また病気たすけは、自分の直面する苦痛から解放されることを最上の利益とする、近視眼のエゴイストをつくり出しやすいことも事実である。けれども、天理教は病気がよくなることを願うことが目的ではないのである。病気という実存的限界情況





を一つのきっかけとして親神の存在を知り、今後は親神のお心に添って生きるというタイプの人間に生まれ更わることに意義があるとされる。今までのところ、天理教の入信者は病気や事情の悩みからという人が大半で、これらは「我が身たすかりたい」という心の状態である。しかし初めはそんな現世利益信仰であっても、信仰の過程で「人をたすけたい」という心の人間に漸次変身してゆく、またそこに病気がよくなるということも起こるという構造になっている。

## (5) かしもの・かりものの理

別の観点から考えてみよう。親神は全知全能であるとよくいう。そこから出てくる素朴な思いは、もし神が全知全能なら病気くらいたすける力があるはずであるという考え方である。全知全能ではあるが病気はたすけないというのでは、パンチに欠けるようにも思います。

天理教布教師は、医者でも薬剤師でもない。そういう国家公認の資格を有しない者が、なぜ病気たすけの分野にあえて踏み込むのか。その根拠は「かしもの・かりものの理」といわれる教理に依拠する。

「人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。
たった一つの心より、どんな理も日々出る。
どんな理も受け取る中に、自由自在という理を聞き分け。」

と原典に示されている。

身体は親神の貸物であり、親神からの借物であって自分の所有物ではない。その証拠に、自分の意志に反して、いつか借物を返す。これが死である。しかし自分の物といえるのは心である。これが天理教の人間観である。身体は自分の所有物であると思い、心は常識や偏見や欲望にとらわれてその光を失っている。これが転倒した人間観であり、仏教的にいえば迷いと執着の世界である。

心の本質は自由である。極端にいえば、神に従う自由も反抗する自由も許されている。信仰といえども自由意志に基づくもので、習慣や強制によるものではない。

この心の遣い方によって「どんな理」も出てくるとされる。すなわち成功も失敗も、健康も病気も、突き詰めると自分の心がつくり出すものである。自分から発したものは全部自分に返ってくる。どんな苦難が起きてきても、それは第一義的には自分の責任であって、世の中が悪い等と責任を他に転化することは解決にはならない。

このように、心の本質は自由であっても、環境の制約があるから、今までのところ自由自在ではない。自由自在というのは、思うことが思うようになってくる境地で、それが陽気ぐらしの理想である。親神はそれを見せてやりたいがためにこの世に出現したといわれる。

身体ですら借物であるとしたら、金銭や物質は人間にとって何であるか。一口にそれらは「天の与え」と教えられる。要約すると、金銭や物質は、まず人間がこの世を生きていけるように、次いではそれらを使って陽気ぐらしするようにという上から、親神が与えたものであるとされるのである。その使い方の基本は、





金銭や物質を自分ひとりの欲望充足のためではなく、多くの人が喜べるように使ってゆくことで、それが生きた使い方であり、陽気ぐらしの道はそこから開けるとされる。カソリックは金銭、物質に対し、「所有は私的に、使用は公共に」というが、それと同じ線上にあるといえよう。

## 五　教理の普遍性と平等性

### (1) 普遍性

以上、天理教教理のうち、共同体構想に有効となり得る分野について触れた。さらにこれを要約すると、陽気ぐらしというのは、単に天理教信仰のモットーではなく、すべての人間が先天的に持っている願望であると思う。天理教はそれをより明確に表明したといえるわけである。もちろん陽気ぐらしの内容については考え方の相違があり、実現の方法についても違いはあるが、目標に関しては一致するものがあると信じる。

もう一つ柱となり得るものとして、世界一列は兄弟であるという思想がある。天理教の場合、これは親神の人間創造という観念が根底になっているが、たとえ信ずる神は異なるにしても、一列兄弟の理念は普遍性があるものと信じる。天理教の持つ寛容性は、今後とも維持されるであろうし、これは諸宗教の融和に役立つ要素であると思う。さらに天理教の人間観、物質観は、苛酷な経済戦争の砂漠に慈雨をもたらし、人と人を結び付けるものとなるであろう。互いに助け合うというあり方も、まさに共同体の精神に合致するであろう。

## （2）平等性

さらに付け加えるべきものとして、天理教の平等思想がある。そこで天理教の重要な社会概念として「高山」と「谷底」があるが、これを手掛かりとして平等思想の大略を述べてみよう。

「高山」というのは、権力、富、知力、体力等、生存競争上有利なものを持っている階層のことで、これは支配層と重なる。「谷底」はそれらから疎外されている弱者、貧困者、被支配階層を意味する。そして今までの歴史は、「高山が谷底をままにする」ことが当然とされてきたのである。しかしこういう事態は「神の残念」として、原典でははっきり否定されている。「高山に育つる木も谷底に育つる木も同じ魂」であるというのが、親神の世界の真実であって、人間がこれを犯すことは悪であるとされる。すなわち後天的権利の相違によって、先天的な人間としての価値の平等性を無視するようでは、陽気ぐらしの社会とはいえないのである。

この社会的不平等を一挙に変革する手段として革命があう。社会主義革命は「谷底が高山をままにする」ことを目指すものですが、原典ではそういう過激な手段を通じて形式的平等を実現しようとする試みは、必ずしもよしとされていない。私の表現によれば、人格の平等化に努力することが第一で、然るのち形式の平等化が次第に実現してゆくのが順序であるという穏健な路線が望まれているようである。

## （3）用木





では、その穏健路線の中身はどうか。原典によれば、親神はまず「谷底」から、将来親神の手足となって世界たすけに身を捧げる人材を見いだし、引き寄せて使われる。そしてこの種の人間を「用木」といわれる。陽気ぐらし世界実現の足どりを普請にたとえ、その用材となって骨組みをつくる人という意味であろう。これら「用木」は国籍に関係ない。「用木」は「高山」である権力者の意志より、親神の教えを重く受け取る人間である。そこで親神の意志が「一列兄弟」であり、人間は平等で、互いにたすけ合って生きることが陽気ぐらしへの道であると知れば、その方向に向かって生きることを目指す者である。一人や二人ではさしたる影響はないが、そういう人間が何百万、何千万となれば、「高山」もそれを無視して行動することはできなくなるであろう。

信仰を異にしていても、親神の観念はなくても、広い意味で陽気ぐらしのために挺身する人間は、すべて「用木」といえる。フィリピンを見て、あるいは最近の韓国の人心の動きを見て、私はその徴候を読み取ることができる。アジアは昔の植民地時代のアジアではないのである。

# 六　共同体構想と天理教

さてこの辺で、共同体構想に関する天理教の姿勢、準備、あるいは可能性について考察することにする。

初めに申し上げたように、天理教は現在のところ「点」と「線」の宗教である。言葉を換えると、布教が最重要の課題と意識されている段階であって、共同体構想について語る具体性が欠けている。また、特にア

ジア地域について、その重要性を優先させているわけでもない。そういうことを前提として、若干の展望を試みたいと思う。

## (1) 天理教は日本の宗教ではない

日本は別として、ただ今のところ天理教の布教線が伸びているアジアの国は、韓国、中華民国台湾、香港、シンガポール、タイ、インドネシア、インド、ネパールその他である。このうち韓国には公称三十万人の信者がおり、約三百の教会があるが、全体から見れば小数派であり、大きな社会的影響力を発揮しているとはいえない。

これらの諸国において出会う問題の一つは、天理教は結局、日本の宗教ではないかという疑いと警戒の念が底流としてあることである。特に韓国のように反日の気分の強い国では、日本帝国主義とそのイデオロギーとしての日本国家神道に対する反発が強く、日本の悪いイメージと、その日本で発生した天理教というイメージが重なって、さまざまの困難やトラブルをひき起こす原因となる。

天理教は日本におこった新宗教であり、教祖は日本人であり、従って教義書も日本語で書かれていることは事実である。また教団形成の過程において、神道の影響を受けざるを得なかったことも否定できない。かといって、天理教は日本の、あるいは日本民族の宗教ではない。立教の主旨がそもそも、世界一列の人間をたすけたいという親神の意志から発しているのであって、日本というワクを越えるべく、初めから設定されているのである。ワクを越えたところに出てくるのは、日本の優越性の主張ではなく、世界一列は兄弟であ





るという平等思想である。

この天理教の平等思想に疑惑を抱いた明治政府は、終始一貫、教祖に弾圧を加えた。ために教祖が警察に拘引、留置、投獄された回数は十七～十八回に達する。八十九歳のときの投獄は最冬のことであり、ひそかに教祖の肉体的抹殺が図られた形跡がある。

教祖がなくなって一年後の一八八八年、神道傘下の教団として天理教会が政府によって認可されたが、圧迫、干渉の手はゆるまなかった。一八九六年には内務省訓令が出され、布教は著しく困難となった。そしてその圧迫は結局、一九四五年の日本敗戦まで続いたのである。天理教が原典のみによって教えを自由に宣布することができるようになったのは、実に敗戦以後のことである。戦後日本が目指した平和指向は、天理教の教えにとって好ましい事態である。

## (2) 人類の故郷としての「ぢば」

天理教が単に日本の宗教ではないということを、歴史の上から申し上げたのであるが、これに関連して、どうしても申し上げておきたい重要な事柄が一つある。それは「ぢば」という、天理教独特の観念である。

キリスト教に創世記があるごとく、天理教には「元の理」という、人間創造の説話がある。しかし「元の理」では、アダムとイブというような、現在の人間と直接つながりのあるような人間が創造されたとはいわれていない。遠い将来、人間として進化する可能性を持つ生命体が、親神の守護で創造されたとするのである。その親神の働きのすべてが結晶された結果生まれた原初の生命体を「たね」、あるいは人間の「子だね」

と表現されている。その最初の生命体が宿し込まれた地点を「ぢば」というとされている。当時の地球の情況は陸と海の区別のない泥海で、時間的にいうと約十億年以前とされる。

長い地殻変動の末、たまたま「ぢば」をその中に含む日本列島が形成された。地名でいうと、日本国奈良県天理市三島町の「一点」ということになる。地理的位置では、北緯三四度三五分四八秒、東経一三五度五〇分四〇秒に相当する地点である。教祖はここにあった中山家の主婦であり、この地点で天啓を受け、「神のやしろ」として救済を始められた。そして現在、この地点を中心に天理教の神殿が立てられ、「ぢば」の標識としての「かんろだい」を囲んで「つとめ」という祭儀が勤められる。そして「ぢば」にある教会が天理教教会本部であり、これは永遠に移転することがないと定められている。

私は何をいわんとしているのか。「ぢば」は、現象としては日本に所在する地点と見えるが、教理からすると逆であって、「ぢば」の周辺にたまたま日本列島が形成された、「ぢば」が先で日本が後である。従って天理教は「ぢば」をすべての根源とするけれども、それは本質的には、天理教が日本の宗教であることを物語らないということである。

この教理の本筋を、いかに現実化してゆくか。これが天理教の課題であり、共同体構想もこれを抜きにして語ることはできない。

天理教信者にとって「ぢば」は、地球上に二つとない聖地と観念されている。各地にある教会も、「ぢば」の方向に向かって礼拝するように設計されている。あたかもイスラム教徒が聖地メッカの方向に向かって祈りを捧げるのと似ている。違うのは、メッカは人間創造と関係がないということ、およびメッカはイスラム





教徒以外は受け入れないということである。

## (3) 比類なき開放性

「ぢば」は一切の国籍、宗教の制約がなく、誰でも参拝することができる。なぜなら、人類共通の生まれ故郷と観念されているからである。神殿は昼夜二十四時間開放されている。またここにあるすべての宗教施設は、原則としてあらゆる国の人に開放されている。この比類ない開放性が、アジア共同体構想の基礎になると思う。この開放性が徹底すれば、天理教は日本の宗教というワクから抜け出すことができ、世界に貢献することができる。

「ぢば」にある教会本部に、天理教徒養成機関をはじめ、教育、文化、スポーツ、音楽等あらゆる施設が集中している。その中で知られているのは、外国語を主体とする天理大学、および大学付属天理図書館、同天理参考館である。図書館にはキリシタン関係の古文書も多く収蔵されている。参考館には世界各国の民俗資料が豊富にそろっており、一般に無料で公開され、研究の便宜を図っている。これらはいずれも一流の内容のものである。

その他に「憩いの家」という千ベッドの近代病院があり、医療に貢献している。医者、専門家の国際交流も盛んに行われている。これも開放性の表れである。国際シンポジウムも近年盛んに開催されるようになった。

天理大学はもともと、海外布教に必須条件である外国語の習得を目的として、一九二六年に設立されたものである。外国語学部には八学科あるが、アジア関係の言語で設けられているのは、韓国語、中国語、イン

ドネシア語の学科である。これらは六十年以上の蓄積があるから、世界の大半の人を受け入れることができるし、必要に応じて人材を派遣することが可能である。この人材のプールがあることは、共同体構想に貢献し得る材料である。

天理大学には選科日本語科という、二年コースの外国人留学生制度があり、アジア諸国からたえず学生がやってくる。卒業後は国に帰り、その利点を生かして、いろいろな分野で活躍している。今のところ人数は限られているが、やがて共同体構想に力を発揮することも夢ではない。

もう一つ付け加えますと、天理は各種スポーツ、音楽の盛んな所である。柔道場にはアジア各国の選手が絶えることなく練習に来ている。ホッケー場ではインド、パキスタン、シンガポール、あるいは韓国のチームとの国際大会がしばしば開かれる。音楽の交流も盛んで、天理高校吹奏学部がタイ王室の招きで、バンコクその他で演奏したこともある。最近では、ウィーン音楽祭の招待で、雅楽がヨーロッパに演奏旅行をしている。音楽に国境はないのである。

## (5) おわりに

以上は共同体構想に対するささやかな貢献であるが、それ以上のことについては、今のところ発表に値する事柄は残念ながらない。それどころか、海外布教を意図して、さまざまの壁に当面し、苦慮しているというのが偽りのない現状である。けれどもこの困難こそ、天理教が日本の宗教から世界の宗教に脱皮する上での試金石であると受けとめ、努力を積み重ねている段階である。この努力が実を結ぶ程度に比例して、天理





教が共同体構想に貢献し得ると考えている。ただ一ついえることは、その努力は拡大することはあっても、縮小することはないであろうということである。

なお天理教は政治と距離を置き、特定の政治団体と結び付くことをできるだけ避けている。これも共同体構想には必要な条件ではないかと思っている。

最後に宗教の統一ということであるが、これも共同体構想と同じく、具体的な提案をする段階ではない。そこで、天理教は、他の宗教と敵対したり、争うタイプの宗教ではなく、自信を内に秘めつつ、寛容の精神でことに当たろうとしている宗教であるとだけ申し上げておきたいと思う。